
夫の浮気

花桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夫の浮気

【Nコード】

N4587J

【作者名】

花桃

【あらすじ】

単身赴任が終わった夫が帰ってきた。
箱を開けて驚いた。

女の挑戦状？（前書き）

大人の浮気話なので、R15とさせていただきます。

女の挑戦状？

「何、これ？」

子どもと夫が野球の練習に出かけた土曜日の朝、彼が持って帰った荷物の箱を開ける。

年末に人事異動が発表され、2年間の単身赴任が、1月1日付けで開けた。

金融機関に勤務する夫は支店次長という立場から、本部の融資部門の課長として勤務することに。

正月明け、引っ越し、仕事の引き継ぎとあわただしい日々が流れた。

夫と共に運び込まれた荷物は和室に積まれたまま。

まずは、洗濯物からということで箱を開ける。

手にとったシーツに絡まる長い長い茶色い髪。

「もー、いやー。」

私は深い深いため息。

よくよくみれば、すごい痛んだ髪。

自前の髪が自慢の私にとって、染めたりパーマで細くなって痛んだ髪はありえない存在。

「この髪を持ち主は、推定、腰まではあるな。」

両手の人差し指と親指で摘んで広げる。

60センチ以上はある。

そんな髪が、指に絡みつく。

悪寒が背筋を、走る。

髪を、ティッシュで包みエプロンのポケットに入れる。

夏のブルーのバスタオルも取り出して見てみる。

夫であろうと思われる長い陰毛に、不自然な長さ、まるでお手入れしていますといわんばかりのカットされた切り口のある短い陰毛をこれまた数本発見。

何やってるんだろという私。

じぶんがやってることがアホくさく思えるが、こうなるとやめられない。

まだ何か出てくるような予感。

パンドラの箱ならば底に希望があるだろうけど、どう考えても絶望とか泥沼しかないようなゴミ箱のような段ボール箱。

箱の中のをチェックしながら、ほかの洗濯物も箱から出し、洗濯機に投げ入れる。

枕カバーが無いことに気付き、寝具袋のファスナーを開ける。

どれだけ洗ってないんだろう。

夫のにおいが充満した低反発枕が布団の中から出てきた。

これは夫の愛用品。

同じものが自宅にもあるので、枕が変わると眠れない夫だけと不自由はなかった。

ブルーの枕カバーを外すと、赤い小さな布がはらりと落ちる。

赤いTバックのショーツ。

私、こんなの持っていないし。

ブルセラで買った、オカズ？

それとも、女装趣味？

悲しい主婦の性。

ひっくり返して裏をチェック。

微かなシミがあるということは、使用済み下着。

1番これをオカズにしていた。

2番浮気相手が脱いでそこにいれたままだった。

3番女装していた。

4番女装趣味の男とつきあった。

答は一つに絞られる。

ファイナルアンサー？

ってやってる場合じゃないし。

追求すべきか、赤いショーツを片手に悩む。

そして、またエプロンのポケットにいれる。

「ポケットの中は、長い髪の毛と赤いTバックのショーツ、これで証拠は2つになりました。」
絵本の世界じゃあるまいし。

はあ、、疲れた。

ムツカエクスプレスに牛乳を入れ、カフェオレを作る。

ポンという音が立ち、できあがりの合図。

カップに注ぎ込むときれいな泡立ち。

泡を見ると気が晴れるが、飲み干して現実を考えると気分はどんより。

しばらくすると洗濯機がピーピーと呼ぶ。

洗濯物を取り出し、籠に入れる。

カラカラと音がする。

「アタシハ ココニ イルンダヨ」

いかにもそんな気分の音。

何だろうと思い、最後のタオルを取り出すと、繊維に絡みついた小さなパールピアス。

「なんだ、見つけて欲しかったの。」
返事をするはずもないピアスに話しかける。

「ポケットの中は、長い髪の毛と赤いTバックのショーツ、パールのピアス。これで証拠は3つになりました。ファイナルアンサー？ファイナルアンサー2番の浮気です。」

なぜなら、夫にはピアスの穴がない。
オカズという答えもあるけるけど、問題は持ち主。

こんなところで探偵ごっこしてどうする、私。

洗濯物のタオルを物干しで干す。

タオル掛けの向こうに広がる晴天。

晴天のなんとかってことわざあったよねえ。

広げてタオル掛けに干すと、さっきと同じ長い髪が数本、指に絡みつく。

まるで、蜘蛛の糸に捕まった虫のように私を絡めて離さない。

何、それは挑戦状？

私はあなたの夫と寝てたのよ。こんなに可愛がってもらってたのよ、どう？妬ける？

そんなことを訴えているかのように、払っても払っても振り払えない。

「せいてんのへきれき」だ！！なんとかの部分を思い出す。

ビンゴー！

洗濯物を干し終わり、別の箱の整理をする。

割れ物注意と書かれた箱のガムテープを剥がす。

DVDデッキとプレステ2が出てきた。

テレビを付けなくてもDVDを見たいと言い出し、オークションで買ったポータブルDVDデッキ。

引越して故障していないか動作確認しなくちゃと思い、電源を入れる。

よかった、通電。

するとカシャカシャと読み込む音がする。

抜き忘れたDVDが入っているんだ。

大好きなガンダムかStar Trekだろうと思っていたら、オプニングがなくなり本編のようだ。

しかもそこには、なぜか裸の男女。

はぁ？ どういうこと？

よく見ると、どうやらその画像の片割れは夫のようだ。

ふーん、このひとが痛んだ長い茶髪女ね。

腰まで垂らした長い髪を揺らした、ちよっとぽっちゃりしたグラマの女が胸を揺さぶりながら、うごめく。

髪の長い女とどこかのラブホで撮影したような画像。
ケータイで撮影？

ウラDVDという感じでも投稿用ということでもなく、自分たちのお楽しみのためのような感じ。

早送りで夫と少し若い巨乳女のセックスを見る。

普通にキスをして、舐めあい、挿入。何もうちでしていることと変わりはない。

ん？と思っていると女の声が聞こえる。

「ユタカさん見て、これからマユはオナニーします。」

どうやら女が夫に送った画像のようだ。

真っ黒な股間が画面いっぱいに広がる。

そこに左手で指を入れ、思いっきりそこを広げる。

右手にはピンクのローター。

それを溝や先端に押しつけようがしながら、指を挿入。

そんな画像がたくさん入っている。

きつと毎日のように送られたものをDVDに書き込んで、パソコンから削除したんだろうな。

動作確認してそのままになったということね。

私は冷静に画像を見つめて思う。

ある時は、ナースやセーラー服のコスプレもある。

「ビンゴー！」

これでもう4つ目の証拠が揃いました。

さて、どうしたことやら。」

もっと怒り狂うかと思ったけど、以外と冷静で淡々とDVDを見つめる。

画像の中の女に目が、アタシが出張中にアナタのカワリにご主人のお世話をしているのよ、アナタが付いてこないから!!

そんなことを訴えているかのようだ。

こうなってくると私の探偵心は収まることはことはない。

夫が持って帰ってきたノートパソコン。

単身赴任中に無線ランにしてしまったので、仲間外れにされている。

確か、昨夜あたしのパソコンでネット遊びをしていた記憶。

インターネットエクスプローラーを立ち上げる。

いつものYahoo!のスタートメニュー。

そして5つ目の証拠をゲットする。

ダブルリーチ!!

使ったことのないYahoo!チャットが立ち上がる。

ふーん、こうやって連絡取り合ってるんだ。

ばっかだなあ。

ログインしたままになっているので、アーカイブを見る。

ああ、ばかだなあ。

消去してないよ。

スクリーンショットを取り、甘い甘い言葉の羅列をコピペしてワードに貼り付け、あたしの外付けHDに格納。

ここまでくると、まだまだ出てきそうなうれしい予感。

ダブルビンゴは目の前だ。

夫と子どもが戻るまで、時間はたっぷりある。

パソコンの電源を落とし、HDを片付ける。

もうすぐ正午だと思った時に、自宅の電話に着信音。

だれだろう。

ダブルリーチ？

もしかしたら、女からの電話？

「マユです、奥様ですか？」

だったらどうしよう。なんて思いながらも、見知らぬ番号を表示するディスプレイ。

「はい。」と出ると、男性の声が。

とても落ち着いた声が聞こえる。

「ヤマザキ ユタカさんのご自宅でいらっしゃいますか？」

「はい。」

「奥様でいらっしゃいますね。」

「はい。」

誰なんだろう。

もしかして、事故にでもあったんだろうか？

とっても、ドキドキ。

嫌な予感が120パーセント。

「初めまして、突然お電話差し上げて申し訳ないです。」

「はい。」

電話って相手の都合関係なくしてくるものだけど、、

「オクダマユの元夫のオクダテツヤと申します。」

「はあ。」

オクダマユ？

それがマユだとわかるまで、少し時間がかかった。

そして、もう一つの言葉、元夫というのも前頭葉に引っかかる。

「うちの元妻のことをご存じですか？」

「いえ。」

「ご主人は関東地区の支店で次長さんでしたよね。」

「はい。」

「私の経営している病院を開業する時の融資で大変お世話になりました。」

「はい、、主人は今出かけて留守ですが。」

「いえ、今日は奥様とお話がしたくてお電話を差し上げたんです。」

「はあ。」

うーん、話がよくわからないけど、この人はドクターなのね。

「どうしても、お伝えしたいことがあります、実は学会が明日そちらであるので今お近くまで来ているんです。お時間がありました

ら、会ってお話したいのですが、お時間いただけませんか？」

「はあ。」

身も知らずの男性から、そんなこと言われても。

でも、この人に会えば真相が分かるかもしれない。

家族が戻って来るのは夕方。

まあ、いいか。女は度胸。

「今からですか？」

ドキドキしながら、返事をする。

「はい。」

マユの元夫の指定するホテルのラウンジが一番わかりやすいだろうということ、そこで2時に会うことになった。

高級ホテルでもあり、出入りの人も多い。

誰かに会っても不倫だと疑われる可能性も少ないだろう。打ち合わせや待ち合わせによく使われている所だし。

急いで着替えて、急いでメイク。

普段着ることのないスーツを着て、コートを出し、パンプスを履く。

なんで、こんなことしてるんだろう。

夫を寝取られるだけの妻だなんて思われたくない、私の最大の見栄

かもしれない。

駅に行くと、地下鉄はすぐに来た。

土曜日だというのに、なぜか車内は空いている。

窓に映る自分の姿をチェックするかのよう凝視する。

ホテル近くの駅で下車。

相変わらず人は多く、雑踏でこった返す。

そんな騒音から一瞬にして離れる。

スカイラウンジまであつという間に体が移動。

大きなアレンジメントフラワーの出迎え。百合の香りに包まれて、指定の場所へ向かう。

入り口で呼び止められる。

「ヤマザキさまでいらっしゃいますか？」

「はい。」

なんでここの従業員が知ってるの？

「あちらでお連れさまがお待ちです。」

案内された窓際の席。市内が一望できる特等席。

そこに同じ年齢ぐらいのスーツを着た紳士が。

私に気がつくのと立ち上がって、会釈をされる。

細身の背の高い人なんだ。

180? 185?

そんなことを考える。

「お忙しいところをお呼び立てして申し訳ありませんでした。初めまして、オクダテツヤです。」

そう言うのと名刺を差し出す。

「いえ、遠い所をわざわざありがとうございます。」

「お礼を言われるようなことでもないのですが、座ってお話しましょう。」

座り心地のよいクラシカルな椅子がふんわりと腰を包み込む。

「何がよろしいですか？」

メニューを差し出される。

目に飛び込んできたのは、「スカーレット・オハラ」と命名されたブレンドハーブティー。

それを指さす。

スカーレットオハラとブレンドコーヒーを、オーダーする。

きれいな紅色のハーブティーが運ばれる。

一口含んでみると、甘酸っぱい香りが鼻腔をくすぐる。

「実は、申し上げ難いことなのですが、、」

そう言うと、目の前に分厚いA4の封筒を差し出される。

「ご覧になる前に、少しだけ話をさせてくださいね。」

奥田哲也と名乗るこの人は、関東のとある場所で歯科を開業している。

妻マユとは結婚3年目に破綻している。

離婚して4年目になった。

当時1歳だった子どもはマユが育てるということで、渋々手放した。

が、親権は放棄していないつもりなので、結婚当時に買ったマンションを彼女に与え、養育費として子どもに不自由させないために10万円毎月送金しているとのこと。

離婚理由は、勤務医としての仕事が忙しく家にほとんど戻らない奥田氏にマユが我慢できなくなったこと。決定的になったことは、開業したいという気持ちから学会専門医になるための研修に没頭したということらしい。

しばらく、勤務している病院を離れ他の病院へ行くことになったことがマユには気に入らなかったようであった。

関西の知らない土地へ行ったことが不満で、子どもを連れてもとのマンションへ帰ってしまい、、、、

「歯車がいったん狂ったら、どうしようもないみたいですね。」

離婚後、マユは仕事を始めた。

大学病院がパートの会計事務職員を募集していた。

そこに奥田氏の力を借りることなく採用となり仕事を始めた。

その病院のメインバンクが夫の勤務先であり、夫の担当だった。

若い人に交ざって、独身気分の夫と離婚して自由になったマユは合コンで親密度を深めた。

2年間の勤務のうち、半分はマユと交際がある。

ざっとこんな説明をしてくれた。

「今のことを踏まえて、封を開けてくださいね。」

丁寧調べ上げた調書。

「マユとは離婚しているので浮気ではありませんが、思うところがあって調査しました。お相手が、顔を存じ上げている人であったことが残念でなりません。お知らせしようかどうか悩んだのですが、どうしても一点だけ奥様に謝罪したくて、本日参りました。」

ダブルビンゴ？

「私に謝るって？」

「はい。」

奥田氏は、1ページずつ説明をしながら私に調書を見せる。

これは、合コンでいちゃいちゃしてるところ。

手を繋いで楽しそうに、ラブホテルへ入るところ。

100枚はあるだろうと思われる画像の数々。

そして、奥田氏所有のマンションから出勤していくバカ夫の姿。

あゝあ、こんなにデレデレちゃって。

いい年して。

しかも、めっちゃ若い娘じゃないのに。

そんなことを思いながら、画像を見つめる。

だんだん、奥田氏の語気が荒くなってくる。

それは、お子さんのこと。

奥田氏が許せないことは、マユが6歳になる小学校入学前の子ども

にお菓子だけ与えて、飲み歩いたり夫と遊び歩いていること。

偶然用事があり、夜8時過ぎに電話をすると娘が出る。

「ママは？」

「お仕事で遅くなるって。」

「ご飯は？」

「コアラのマーチ食べたよ。」

この会話にいてもたってもいられなくなり、娘に会いに行き近くのファミレスでご飯を食べさせた。

何度も連絡しようとケータイに電話するけど、不在。留守電にメッセージを残しても折り返し電話もない。

帰宅したマユが、子どもがいないと大騒ぎになっていたところに帰宅したら、誘拐犯扱い。

警官の前で大げんか。

「勝手に連れ出すな。」

「電話したけど気がついていないのは誰だ。」

養育費を払っているし、面接交渉権は充分あるということを話、大げさにならずにすんだ。

「自分のことは棚に上げ、やってられませんよ。しかも、連れていくよって電話したのに、出てくれないし。」

夫が泊まりに行く時だけ、近所にすむ姉のところに預けているという。

夫と交際する前から、マユの男遊びは止まることがなかった。

そんな女にしてしまったのは、半分は自分の責任でもあると思い、何度も子どもだけは引き取るので好きにしていよ。という申し出をしたが、マユは首を縦には振らなかった。

「なぜ？」

「マユにとって子どもは、金づるだからです。」

養育放棄をしても、人質に取っているからです。

子どもが手元にいる限り、私は養育費と住むところを提供しているんです。

マユが再婚するまで、子どもが大学を卒業するまでは娘のためになら惜しむことなく資金援助はしてあげたいんです。

本心は、裁判を起こしてでも自分のところに引き取りたいんですが。

」

心の中で、このマユをいう女を殴ってやりたい気持ちがふくれあがる。

同じ母親として許せん！！

「最近、やっとお見合いで結婚相手が見つかりまして。」

「よかったですね。」

「ええ、彼女が子どもを引き取ってもいいよ。と言ってくれたので、その話をしに、先月マンションへ行きました。」

「ええ。」

「マユはとんでもない女なんです。彼女の前にも見合いを何度もしているのですが、どこからか見合いがあるということを聞きつけて、必ずその場に子どもを連れてきて、乱入するんです。」

”あたしばかりに子どもをおしつけて
自分だけ幸せな結婚生活をしようなんて
絶対に認めない”

そんな言いがかりをつけにくるんです。」

「狂ってる。」

「そうしたのは半分は私のせいだと思っているので、不憫にも思います。」

「はあ、、、」

「そうそう、話がそれましたね。マンションへ行きチャイムを押したんです。そうしたら

私の置いていったパジャマを着て、あなたのご主人がドアを開けて出てきたので、思わず殴ってしまいました。

しかも、顔を知ってる人だったこともあり、思いっきり何してるんだって。」

「はあ。」

「申し訳ありませんでした。」

突然のことであつとして殴ってしまい、本当に悪いと思っています。

この1ヶ月ずっと心にとげが刺さっていました。」

「そんなことのために、わざわざ?。」

「いえ、それも半分。」

「もっと殴ってくださいってもよかったのに。」

調書を見て、あきれかえる夫の行動に私もグーで殴ってやりたくて拳に力が入っている。

「今日は、どうやらまだマユと続いているようですので、そのご忠告に参りました。あの女の犠牲者は私ひとりで充分です。」

「はあ。」

言葉が出てこない、私。

でも、つぶやく

「ダブルビンゴ！」

最後の切り札！

奥田氏に丁寧にあい拶をし、ラウンジを後にした。

地下鉄の窓ガラスに映る私の顔は、行きよりも5歳は老けた顔をしている。

心の中では、夫にもその相手にも怒りがこみ上げてきて止まない。

情けなさに、涙がこぼれそうになる。

あの時、ついていかなかったのは、夫を信用していたから。

子どもの転校のこと、家を購入して3ヶ月も経っていなかったこと、義父母の介護などを考えると、素直に帯同することはできなかった。

今更ながら、後悔する。

誰に対して。

それは小さな子どもの心を傷つけてしまったこと。
育児放棄という母親としてやってはいけないことへの、片棒を担がせてしまったこと。

「おかーさん、ただいまー。」

元気な息子の声がする。

「あのねー、きょうねー、すごくがんばったんだよー。監督に誉めてもらったんだよー。」

試合にでも出してもらったんだろうか。

いつもと声が違う。

「おかえりー。ホームランでも打ったの？」

「2ベースヒット、ねー、おとうさん。」

頷く父親。

「お風呂入ろうか？」

「うん。」

ジュースを飲むことなく、2人は仲良くお風呂へ向かう。

「夕飯は、カレーだよねー、いいにおい。」

息子がパジャマを着て、ダイニングテーブルに着く。

いつものように、家族の皿を並べご飯を付ける。

「へー、すごいなあ、そんなにお手伝いもできるんだ。」

「そうだよー、ご飯だって上手に炊けるんだよ。」

この2年間で子どもができるようになったことの多さに驚く夫。

「そっかあ、お風呂に入っても、大きくなったなあって思ったもんなあ。」

「なんで？」

「自分でシャンプーできるようになったし、体も洗えるようになったし。」

「そうだよ、もうおかあさんとお風呂に入っていないんだよ。」

カレーを一口食べた夫が、急いで水を口に含む。

「どうしたの？」

「これ劇辛すぎ！！いつもこんなに辛いのか？」

「もう中辛じゃなくて、辛口になったんだよ。ねー、おかーさん。」

夫のカレーにだけ、辛さ増強パウダーをこっそり仕込んだ私。

子どもが寝てから、リビングのソファでテレビをつけたままうた

た寝する夫を新聞で叩いて起こす。

「いってえ。なんだよー。」

「話があるの。そこに座って。」

「なんだよお。」

人差し指に茶色い髪を巻き付けて、夫の間の前で両手を広げる。

「これなに？」

「なんだ、それ？」

「よくみて。」

「糸か？」

「引っ越しの箱から出てきた。」

「はぁ？引っ越し屋のか？」

「違う、あなたの布団のシーツについてた、バスタオルにもいっぱい絡まっていた。」

「手伝いにきた支店の若い女性の髪が落ちたんだろう？」

「引っ越しの手伝いに来るような人は髪を束ねます、普通は！！」

語気を荒くしている私。

「何が言いたいんだ？」

ちよつと夫は腹立たしそうに言う。

「じゃあ、これは？」

目の前に赤いレースのTバックショーツを広げる。

夫の目が泳ぐ。

「新品、買ったの？刺激的だね。」

「ふざけるのもいい加減にして！！枕カバーの中から出てきました。」

「ブルセラで買って、夜のオカズにしてたんだよ。もー、いいじゃないか。」

そう言って私を抱き寄せようとする。

「触らないで！！そうやって、ごまかさないの！！！！」

ものすごい勢いでその腕を振り払う。

「なんだよー、機嫌が悪いなあ。もうすぐ生理でもくるんじゃないか？」

「ちがーう、バカモノ！！」

「何がバカモノなんだよ。」

夫の声がでかくなる。

最後の切り札を出す決心がつく。

奥田氏から頂戴した証拠写真を10枚見せる。

「これは何？」

「1枚目 合コンでいちゃいちゃ。2枚目 これから手を繋いでラブホテル入ります。3枚目 気持ちいいことしちゃって気分ラブホから出てきました。4枚目 合コン帰りなのかな？彼女のマンションの前で抱きついています。5枚目キスしています。まだあるよ。見たい？」

そう言ってトランプのカードのように扇にして見せる。

「どのカードが一番好き？引いてごらんなさい。」

夫の顔から血の気が引く。

冷や汗が流れるのか、汗を袖口で拭う。

「これどうしたの？コラージュ？オレにそっくな人だよね。よくできてるねー」

さっき夫を叩いた新聞を手にして、思わず夫の頭をはり倒す。

「バカモノ！！往生際の悪いやつ。」

「家庭内暴力、はんたーい。」

「ふざけるのもいい加減にしろ！」
だんだん私の口調も荒くなる。

そして、あきらめの悪い夫に淡々と話す。

「奥田哲也さんを知ってますね。」

丁寧な口調で話す。

「ああ、知ってるよ。歯医者さん。」

「頬のアザ、転んで打ったって言ってたけど、違うよね。」

「転んだんだよ。」

「奥田氏に殴られたんでしょ。」

夫が頬に手を当てる。

「何って？」

「今日、会いました。そして話を聞きました。ここに証拠の資料もあります。ご覧になりますか？」

封筒を差し出す。

観念する夫。

顔がずっと下を向いたまま。

奥田氏に会って聞いた話を、淡々と話す。

フロアリングの上に夫を正座させる。

離婚しているので、彼女には私への慰謝料請求権利はないけど、私にはマユへの慰謝料請求する権利はあることを話す。

「ここに揺るぎない証拠があります。彼女に請求してもいいですね。」

不思議だ。

ものすごく怒っているはずなのに、とっても冷静な私がいる。

「もう終わったことだから、許して欲しい。」

頭を下げる夫。

「あなたと離婚するっていったら、どうする？」

今のポストが終われば、夫には支店長という一国一城の主になれるチャンスが巡ってくる。

が、会社の内規で妻帯者しか支店長になれないという規則がある。

ここで離婚なんてことがあれば、夫は出世のチャンスが無くなる。

しかも、単身中の浮気が原因だなんてばれた日には、飲酒運転と同じくらいのペナルティーが待っている。

「ごめん。」

小さな声がする。

「ごめん？それって謝ってないでしょ？」

すごく冷ややかに言う私。

「ごめんなさい、申し訳ありませんでした。もう二度としません許してください。何でもします。」

深々と頭を下げる夫。

もうこれ以上下げれば、フローリングに穴が開くだろうというくらい。

「ホントに何でもする？」

「はい、奥様の仰せの通りにいたします。犬になれば犬にでもなります。」

心の中で、よっしゃー！！大きくガッツポーズ。

切り札は出してみるもんだ。

「ケータイ出して。」

「はい。」

素直に差し出す。

「アドレス帳からマユさん消して。」

「ここです?」

「はい、私の目の前で。」

消去したのを確認。

彼女のアドレス、電話番号を拒否設定する。

それから、夫のパソコンを立ち上げる。

メーラーからメールをすべて削除させる。

プロバイダのメールフィルターに彼女のアドレスを登録。

m i x iなどのSNSをすべて退会。

もちろん、Y a h o o ! メッセンジャーもY a h o o ! I D も削除ありとあらゆる会員登録をすべて退会して、メールアドレスも変えた。

「明日はケータイショップでケータイを買い換えます。」

「、、、はい。」

渋々返事をする。

ついでに、パソコンを一晩かけて初期設定に戻すことにした。

この作業は私が請け負う。

「それから。」

「それから？」

まだあるんかよーという顔をする夫。

「じゃあ、明日の日曜日、分別回収だから、その当番してくれる？」

「そんなことでいいの？」

「うん、この黄色いジャケット着て朝7時から9時までゴミステーションで立っててね。」

「了解。」

「これでお終い。今日のところは。」

夫の顔に安堵の色が点る。

翌日、朝早く夫はジャケットを着て回収場に立つ。

そんな夫を見ながら、私と子どもは近くのカフェへモーニングに行く。

出会った奥様たちから

「ご主人、なかなかやりますね。」
なーんて声をかけられる。
そのたびに、私は

「でっしょー。」と笑って答える。

近所の奥さんたちに

「おはようございます。ご苦労様ですね。」

「単身赴任から帰ったばかりなのに、お疲れ様ですね。」

満面の笑みで挨拶をしてもらえたと自慢げな夫。

夫は知らない。

この地区に住む男性は一人も知らない。

浮気がばれた男性は、自治会の黄色いジャケットを着て分別回収当番をするペナルティーがあることを。

「私は粗大ゴミ扱いされています」という妻たちしか知らない暗黙の約束。

このまま、回収車に乗せていってもらいたい私だった。

「次は、レッドジャケットだからね。」

カフェでは隣の地区で、回収車が5年ぶりのレッドジャケットを着た男性の前で止まったという話題に花が咲く。

最後の切り札！（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。
本当の修羅場や葛藤はこれから始まるんですよ。

今日のところはこれくらいにしといたるわ！！つてところですよ。

続きは多分ないと思います。

ご意見、ご感想、よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4587j/>

夫の浮気

2010年10月17日22時41分発行